

## 集落の消滅、延命。

—富山県旧細入村を対象とした時間軸の建築的プロセス—

建築学専攻  
建築設計研究

ひろかわ しおん  
MJ23131 廣川 史恩  
指導教員 小埜 芳秀

**序章 はじめに****0-1 富山県について**

富山県は、歴史上における数々の災害から『自然と大きく距離を測る文化』から成り立つ。

**0-2 研究背景**

きっかけは、自らの卒業設計にて調査を行った富山県富山市旧細入村集落群において、日本で有数の希少な植生地、幹線インフラの現存による豊かな景色が成り立つにも関わらず、消滅へと向かう現状を目の当たりにしたことによる。

**0.3 研究目的と構成**

そして本研究の目的は、旧細入村のランドスケープ/インフラの調査を通して集落が消滅へと向かう真理を追究すること、そして建築的操作において旧細入村が「消滅するまでから未来」を示し、「集落の延命」を表現することである。

**第1章 消滅から延命への視点****1-1 九相図**

本論文の消滅に対する表現的価値は「死」の過程を九つの相として段階的に描いた『九相図』との出会いから始まる。

**1-2 消滅過程への価値観**

そして、九相図/メメントモリ/旧摩耶観光ホテル/100日後に死ぬワニの視点から「消滅過程」に付加価値を得る表現方法をまとめた。

**1-3 延命を目指した設計（事例調査）**

富山県まちのかおプロジェクトの調査と伊勢神宮-桂離宮から「建築-ランドスケープ」の関係性とその時間軸における段階的プロセスが『建築による延命』の性質を現すと考える。

**1-4 建築とランドスケープの関係性****1-5 章結 土地の延命**

1章のまとめとして建築とランドスケープの関係性から「土地の時間軸を段階的に示唆すること」を延命と述べる。また、集落が「消滅するまで-消滅後」の時間軸を表現することで『集落の延命』を図る。

**第2章 対象敷地と歴史****2-1,2 調査敷地の選定**

はじめに、8つの限界集落群が地球の形成過程で自然的営みとインフラが通う人工的営みによって現れた集落であることを述べる。



図1：地球の地殻形成図

図2：8つの集落とインフラ

**2-3 旧細入村の歴史**

また、旧細入村限界集落群の歴史をまとめた。

**2-4 章結 地形的特徴とインフラによる集落の現状**

2章を通じて、8つの集落が地球形成による『インフラ』とそれに伴う『ランドスケープ』による特徴で分類できた。そして各集落におけるインフラ-ランドスケープの関係性が土地の消滅に対する根源的原因であると仮説を立てた。

**第3章 限界集落の調査****3-1 消滅を迎えた第9の集落**

調査の対象を得るため、旧細入村で既に消滅した加賀沢へ行った。うっそうと茂る草木と擁壁/基礎など人工物が共存し続ける。また、集落が消滅へと向かう中で、国道や線路のインフラがそれらを繋ぎ続けており、『集落の延命』に向けて調査の手懸かりを得た。

**3-2 各集落の調査**

調査として各集落のデータシートを作成する。1枚目はダム/線路/国道/旧街道のインフラをマッピングし、過去図面から各集落の変遷を現し、インフラを中心とした歴史をまとめた。2枚目は、各集落のランドスケープとそれに伴い生まれたインフラによる「集落の形成プロセス」とそれらの歪から生まれた集落の物質をまとめた。3枚目は、集落の物質の実測調査を表現し、現状の写真と共にまとめた。



図3：1枚目

図4：2枚目

図5：3枚目

### 3-3,4 章結 集落形成のプロセスから生まれた物質

3章の結論として各集落のランドスケープとインフラから現れる歪をまとめ、位置関係を示した。歪=集落の物質は集落の境界部分に現れ、集落の延命へとつながる手懸かりであると考え。

## 第4章 8つの集落の分析と手法

### 4-0 分析 集落の人的視点

本論 3-1, 2における知見から、各集落の急加速度的な人口減少の理由と関係性を評価した。

### 4-1 集落が消滅へ向かう仮説

そして、これまでの調査から集落の「ランドスケープ」と「インフラ」の2視点の分析から集落消滅の根拠的原因を模索する。

### 4-2 まとめ 集落のランドスケープとインフラ

### 4-3 分析

旧細入村は日本海側-太平洋側の植生合流地点であること、溪流地-平坦地-傾斜地が各集落でコンパクトにまとまることから、全国でも有数の植生的特徴がみられる。3-4で示した集落の物質周辺の断面図から傾斜、標高を読み取り、集落の植生可能性マップを作成し、各集落現状との比較を可視化する。

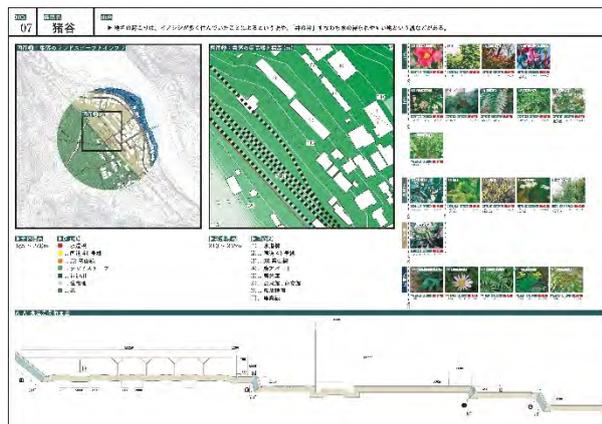


図6：植生可能マップ

### 4-4 小章結 土地が消滅へ向かう根拠的原因

各集落における植生可能性と現状との比較分析から、集落が消滅へ向かう根拠的原因を『土地の貧困化』とし、それらが各集落の溪流地-平坦地-傾斜地の隔たりを生むと考えた。

### 4-5 集落の景色

### 4-6 手法 土地の貧困の解決

健全な土壌のためには通気水動脈の視点から、大地-水-空気の循環を形成することが必要である。現状、土地の貧困化を引き起こしている集落の物質やその周辺を利用し、土地のランドスケープと時代を超えて等価に現れる建築を計画する。そして、地域間に現れた溪流地-平坦地-傾斜地の隔たりをつなぐことが必要である。

## 第5章 設計

### 5-1, 2 時間軸の設計と集落の計画

計画対象地域である旧細入村は、人口推移から2075年までに消滅を迎える。そして、4章述べた、集落に生息すべき希少な植生(溪流地-平坦地-傾斜地の3属性)に着目し、それらを保存、育成する機能を9つの集落を通じて計画する。2075年以降における新たな植物園計画へと向けて今後50年間、集落のランドスケープを豊かにする建築的提案を目指す。

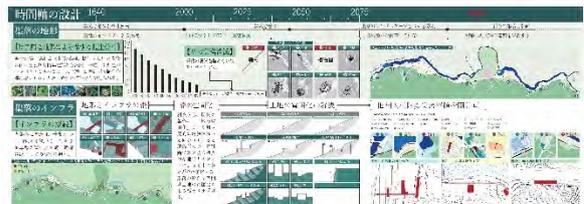


図7：時間軸の設計

### 5-3 対象敷地

各集落の特徴から溪流地-平坦地-傾斜地の植生を育てる地域を選定する。そして、それぞれの種子を保存、研究する3地域を設定した。溪流地の植生は、水道橋により半永久的な水の供給が見込める『猪谷』、平坦地の植生は、ダム湖との境界に住宅地が立ち並び、用水路と手摺りが連なる『岩稻』、傾斜地の植生は、銀山へ続く旧街道と他集落へと向かう国道、鉄道が立体交差し傾斜地が連なる『庵谷』に保存機能を設計する。

### 5-4 計画-設計

対象敷地それぞれに現れる『集落の物質』を利用し、集落に新たなつながりを生む。設計の順序は以下のとおりである。

- (1) 現状の建物の解体と跡地に対する思考
- (2) 新たな集落のつながりとしての建築
- (3) ランドスケープの整備と持続

そして、設計の順序は以下の通りである。

- ① 集落の物質を再編し地域間の隔たりが見られる場所につながるの線を生む
- ② つながりの線が周囲のランドスケープに伸縮し、建築機能を有する空間を生む

九相図の表現に倣い、集落の現状から未来を描く。建築とランドスケープ双方の計画と時間軸を描くことで『集落の延命』を目指す。

### 主要参考文献

- 1) 内山節「いのちの場所」岩波書店(2015)
- 2) 山本聡美「九相図をよむ」角川ソフィア文庫(2023)
- 3) 高田宏臣「土中環境」建築資料研究社(2020)
- 4) 矢野智徳「大地の再生 実践マニュアル」(2023)
- 5) 四井真治「地球再生型生活記」(2023)
- 6) 細入村史編纂委員会「細入村史続編」細入村史(2005)